

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科		地理学専攻
指導教員	所属・職名		氏名			
	文学部・教授		小西 正捷		印	
自然・人文の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題	スリナム社会における黒人エスニシティと同化主義；ある政治家の個人史を通して					
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科地理専攻・博士後期課程4年		岩田 晋典		印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科地理専攻・博士後期課程4年		岩田 晋典			
研究期間	2003年度					
研究経費	200千円					

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、スリナム共和国の政治家 D.ボウターセに焦点を当て、軍曹から独裁者そして政党党首へと至る彼のライフヒストリーを詳細に調査することによって、同社会の黒人のエスニシティとスリナム同化主義の関係を明らかにすることを目的にしたものである。そのために、旧宗主国オランダにおいて資料収集につとめ、彼の個人史、彼が取った政策や彼の表象のされ方の変化、そして同時代のスリナム政治史について考察を進め、彼が唱える同化主義的イデオロギーと黒人のエスニシティがどのように関わっているのかという問題に取り組んだ。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[スリナム] [黒人] [エスニシティ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、スリナム共和国の政治家 D. ボウターセに焦点を当て、軍曹から独裁者そして政党党首へと至る彼のライフヒストリーを詳細に調査することによって、同社会の黒人のエスニシティとスリナム同化主義の関係性を明らかにすることを目的とした。それは、人類学におけるエスニシティ論を援用したカリブ海地域研究と位置付けることができる。

スリナム社会のエスニシティ分析はほとんどの場合、たとえば「アフロ・スリナム人」という名づけに典型的に示されるように、各民族の同一性が起源となる地域に基づくという点で多文化主義的・文化相対主義的民族観にもとづいている。しかし、黒人の場合、白人やオランダ人が参照項となるポストコロニアル的な性格は無視できない。その顕著な現れが、黒人と同化主義の結びつき、そして黒人とスリナム人を同一視する傾向である。D. ボウターセの政治活動は、黒人のこうしたあり様から強い影響を受けている。本研究は、スリナム社会の現代史(とくに政治史)と黒人のエスニシティという二つの社会的背景の中に彼のライフヒストリーを位置付け、彼が取った政策や彼の表象のされ方の考察を通じ、同化主義的イデオロギーと黒人のエスニシティがどのように関わっているのかという問題に取り組んだ。

本研究において行なった具体的な活動内容は、スリナム共和国の旧宗主国であるオランダ王国において、D. ボウターセを取り上げている文字、映像、音源資料の収集と、それを元にした分析である。

次に、本研究の特長について述べたい。

1. スリナム社会についての研究

カリブ海地域は、日本の学術分野において最も研究が遅れた地域とよく、いわば地域研究の周辺に位置している。この地域から生まれた(ポスト)植民地主義研究やアイデンティティ論、音楽を中心とする文化活動という豊穡な言説・文化の生産と比較すると、この地域に関する研究の停滞は意外としかいえない。その中でも、スリナム社会を専門に扱う研究は日本で皆無である。したがって同地域は、日本の学術分野における周辺の周辺を占めている。

けれども、カリブ海地域が学術分野に果たした貢献と同様のものをスリナム社会にも期待することができる。同社会は類稀な多文化社会を構成しており、その考察は、グローバル化によって多くの国家が多文化主義を国是としつつある今日、社会の動態の分析に対して多くの知見をもたらすものであり、本研究はこうした作業の一部となっている。

2. オランダが宗主国であった地域におけるポストコロニアルな問題への取り組み

ポストコロニアル研究は刺激的な成果を生産し続けているが、研究の主体は世界各地に植民地を抱えてきた英国・フランスそしてアメリカにあり、また考察の主要な対象はこれらの国の(旧)植民地や植民地的領土にある。

けれども、アパルトヘイトの語源がオランダ語であることが示唆するように、苛烈な植民地支配の意味を考える上でオランダ王国とその植民地の存在は無視できない。旧オランダ王国のポストコロニアル状況に関する研究は、日本においてはインドネシア研究に豊かな蓄積があるが、オランダの植民地経営のもう一つの搾取対象であったカリブ海地域についてはよく知られていない。

スリナム社会という元オランダ植民地で脱もしくは反植民地主義を唱える政治リーダーに焦点を当てた本研究は、こうしたポストコロニアル研究という文脈の中に対して興味深い事例をもたらすと言えよう。

3. エスニシティ研究における新たな視座への提言

従来のエスニシティ研究は多文化主義的民族観を前提にしてきたと言える。これはいわば民族(集団)を水平に伸びる認識枠組みに併置するものである。しかし、グローバル化が進行する現代社会において民族の動態を考察するには、水平だけではなく、垂直に伸びるベクトルの上でも民族を捉える必要がある。本研究では、多文化主義的な黒人像と同化主義的な黒人像がすどく対立している状況が示されており、多文化主義的視点を暗黙のうちに採用するエスニシティ研究を再考する契機となると思われる。

研究成果の概要 つづき

本研究の収穫として、以下の点が挙げられる。

第一に、さまざまな資料の分析を通じて、D. ボウターセが依拠する社会観／イデオロギーと同化主義が強く結びついていることを確認することができた。民族ごとに組織されている政党による、いわゆるエスニック政治に対抗する形で、「スリナム人」として一体することを主張する、それが彼の政治的主張となっている。

また、黒人が「アフロ・スリナム人」として多文化主義的に構成される一方で、D. ボウターセの政治活動に見られるように同化主義と強く結びついていること、そしてそれが、スリナム社会の歴史上、20 世紀初頭から繰り返し確認できるということが分かった。すなわち、黒人の中には、「多くの民族の構成体」としてスリナム社会を捉える立場と、スリナム社会を暗黙のうちに黒人の集まりと捉える立場があるが、D. ボウターセの活動は、後者に加えることができる。

さらに、黒人と同化主義の結びつきには、けっして無視することができない他の主題も関わっていることも分かった。すなわち、脱植民地運動と政治独立、社会主義、そして反植民地運動である。D. ボウターセらの活動や、それが参考にした同化主義者の活動には、同化主義による脱植民地化、(実質的な)政治独立、社会主義的な政策の採用、反植民地運動(つまり反オランダという姿勢)が重なり合っている。

そして、こうした問題系を黒人のエスニシティとして捉えた場合、それを同化主義として一括することができ、また、多文化主義と二項対立的な関係を形成していることが明らかになった。先に述べたように、黒人と「スリナム人一般」を同一視する傾向は強い。そしてこうした立場は、スリナム社会を支配するもう一つの社会観(もしくは黒人観)である多文化主義的なアイデンティティ(たとえば「アフロ・スリナム人」と、相容れないものとして強く対立している)のである。

今後の課題として、より広い枠組みの中で D. ボウターセの政治的实践を捉えることを挙げることができる。たとえば、カリブ海地域における社会主義と黒人との関連である。よく知られるように、奴隷の子孫が多く住むカリブ海地域では、冷戦期に至るまで社会主義政権が少なからず存在した。本研究を通じて、黒人と社会主義の関係は、単なる冷戦構造内での布置以上に、奴隷制という歴史的な背景とも強く結びついているのではないかという印象を得た。こうした問題は、今後取り組むべき重要性を備えているであろうし、それに取り組むことによって本研究の主題にも新たな知見を見出すことが可能であると思われる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①「スリナム共和国都市部における『アフロ・スリナム人』とその他の黒人エスニシティ」(立教大学大学院文学研究科博士号学位申請論文、2004年)

③「D. ボウターセー -黒人として、スリナム人として-」(2004年4月24日、東京外国語大学アジアアフリカ研究所共同研究プロジェクト「間大西洋アフリカ系諸社会における20世紀<個体形成>の比較研究」(代表・真島一郎)における研究発表)